

現代社会における読書～読書離れからみるこれからの読書～

58130 杉原綾佳

はじめに

第1章 読書率の推移

第1節 「読書世論調査」による読書率の推移

第2節 「学校読書調査」による読書率の推移

1. 年代ごとの読書率
2. 小・中・高校生ごとの変動の要因

第2章 読書習慣の形成

第1節 幼児期の読書習慣

1. 絵本の読み聞かせ
2. 絵本が与える影響
3. ブックスタート活動

第2節 小学生の読書習慣の形成

第3節 中学・高校生の読書習慣の希薄化

第4節 朝の読書運動

おわりに

はじめに

毎日新聞社が毎年行っている「学校読書調査」によれば、開始した直後の1955年には1ヶ月に本を1冊も読まないという高校生はわずか3.7%だったが、2005年には50.7%と半数を超えていて、若者の読書離れが深刻な社会問題になっている。

では、若者の読書離れが深刻な問題になるのはなぜか。

一般的な意見としては、読書は学力・言語力育成のために必要と言われている。

2007年4月に全国学力一斉テストが実施され、そのテストでは、国語と算数の学力テストだけでなく、学校環境に関する調査という質問事項があり、テスト成績との関係等が質問され分析されている。その中で、読書について、「読書は好きですか」、「家や図書館で、普段（月～金曜日）、1日にどれくらいの時間、読書しますか」という質問がされている。小学校では読書好きかどうか、読書時間の差とテストの結果の間にはきれいに、好きで長いほど、得点が高いという結果が出ている。

学力のために読書をしようという取り組みは、本当の意味で読書の価値や働きを示しているようにはみえない。生活経験の視野を越えた時空間の世界、心という内側の世界、思考という限りない世界、それによって今まで見えていなかったものが見えてくることで広がる想像の世界を旅する過程が読書であるだろう。〔秋田:2008:6-7〕

学力や言語理解のためもあるが、それだけではなく、読書には、自分が考える以上の世界が広がっていく喜びがあると思う。読書離れが広がるということは、学力低下、理解力の低下以外に、想像力の低下が考えられる。想像力低下により、相手の立場にたって物事が考えられないことから起きるいじめ問題などは、人間疎外を助長することになるし、あらゆる物事は取り組む時に、想像力を働かせる必要があると思う。つまり、人間形成において読書はなくてはならないものであるということだ。そこで、私は本稿の問題設定を「読書離れの原因とそれを防ぐためにはどうすればいいか」にした。

章立ての説明をする前に、今回書籍には雑誌と漫画を含めない点について説明したいと思う。今回、漫画や雑誌などの絵や写真が多く、文字数が少なく、書籍と呼べないものについては除外した。読書は、知識・情報の伝達手段だが、それだけではなく、読むこと自体にも大きな意味があり、人間の本質にかかわることである。では、その「読む」こととはどういうことなのか。「読む」ことは、目の前に実際には存在しないものやことがらを、あたかも存在するかのように自分の中で、イメージとして描き出して、何が書かれているかを理解すること[天道:2005:19-20]である。純粋な読書を考える時に、イメージが描かれやすい写真や絵が多いものは、イメージし理解しようとする力を半減させているのではないかと思う。そこで、写真や絵が多く使用されている「雑誌」や「漫画」は除くことにした。

まず、第1章で先行研究として、毎日新聞社が1947年から実施している読書世論調査と1954年から実施している学校読書調査を使い、読書率の推移をみていく。

1節では、「読書世論調査」からどのような時に読書率が上がり、または、下がるか分析していく。2節では、「学校読書調査」から、年代ごとと、小・中・高校生に分けての分析から、読書離れについて考察していく。

第2章では、「読書離れを防ぐためにはどうしたらいいか」を考えるために、まず、世代ごとに区切り、読書習慣をみていく。この中では、特に若者（小学生、中学生、高校生）に焦点を絞ってやる。読書習慣がどのように形成され、あるいは、消滅するのかを追っていくことによって、読書離れの原因とそれを防ぐための方法がみつかると思った。1節では、幼児期の読書習慣が大人になっても影響を及ぼすか、学校読書調査の資料と私が独自にアンケートしたものを比較してみていく。2節では、読書離れが起きていない小学生の読書習慣について、何故おきていないのか、その要因になるであろう「朝の読書」について言及して、4節につなげていく。3節では、最も読書離れが起きている中・高校生について同様の作業を行っていく。何故、読まないのか、また、どうすれば読むようになるのかを、学校読書調査を元に見ていく。4節では、小・中・高校生において読書率を押し上げる要因になっている「朝の読書」運動についてみていくことにする。

第1章 読書率の推移

ここでは、毎日新聞社が1947年に始めた16歳以上の全世代を対象とした「読書世論調査」と1954年に始まった、小学校4年生から高校3年生までの児童・生徒を対象にした「学校読書調査」を使用し、読書率の推移を分析する。この読書率には3種類あり、書籍でも雑誌でもとにかく「読む」と答えた人の割合を「総合読書率」といい、書籍を読むと答えた人の割合を「書籍読書率」、週刊誌、月刊

誌のどちらかでも読むと答えた人の割合を「雑誌読書率」という。

第1節 「読書世論調査」による読書率の推移

「読書世論調査」では、3つの読書率の中で、書籍読書率（以下「読書率」とする）を用いる。まず、基本的な読書率の傾向をつかんでおく。

読書率では、男性のほうが常に女性より書籍を読んでいることが分かる。しかし、その中でも10代の女性だけは男性より読んでいる。年齢別では、10代から20代、30代と年齢が上がるにつれて落ちていくが、その差が、男性は比較的小さいのに対し、女性は大きい。

読書率を変動させる要因

1945年の敗戦後、その日の食料に困りながらも、長い間の心の空白を埋めるために人々は本を求めた。しかし、本は高く、読みたくてもなかなか読めない時代だった。1949年、初めて集計した読書率は17%に過ぎなかった。これを救ったのが、安価な文庫本の登場だった。1951年の文庫本ブームは、低迷していた読書率を一気にひき起こす救世主となり、前年（1950年）の17%が21%に上昇した。こうした読書率の上昇に拍車をかけたのが、1952年からの全集ブームである。読書率は、50年(17%)→51年(21%)→52年(26%)と急激に増えていった。朝鮮特需¹で上向いた消費者の購買力を刺激し、一気にブームを作っていたのである。

第3弾の上昇の原因は、1954年の新書判ブームである。54年に出版された新書判は、多種多様なものが出版され人気を博した。値段が手ごろなうえに、活字が大きく読みやすい、それに文庫本より本に近い感じなのが、人々に受けた。

新書判ブームはその後、1959年、61年、63年にも起こり、いずれも40%前後の読書率を維持した。ついで、読書率を伸ばしたのは、1964年の東京オリンピックの年で、前年の40%が44%になった。オリンピック関連の出版物が、店頭を飾った。以後、第一次石油ショック後の1975年まで、45%前後で安定して推移した。

ところが、1976年の出版不況を境に様相は一変し、1976年には47%あった書籍読書率が77年には44%に落ち、78年にはさらに39%まで低下した。

77年は、「人間の証明」（森村誠一）「八甲田山死の彷徨」（新田次郎）「犬神家の一族」（横溝正史）などの大量宣伝の映像化本が大ベストセラーになった年である。78年も、「野性の証明」（森村誠一）「北条政子」（永井路子）「聖職の碑」（新田次郎）など映像化本のベストセラーが続いた。長く出版史上に残るほどの大ベストセラーが2年にわたって続出しながら、読書率はどんどん下がった。

その出版状況の中で、1979年に読書率がにわかに回復し、前年の39%から44%まで上昇した。なかでも、中・高年層の回復が顕著で、40代では36→41%に、50代では31→39%に、60歳以上では19→30%に増加している。

¹ 朝鮮戦争に伴い、在朝鮮アメリカ軍、在日アメリカ軍から日本に発注された物資やサービスを指す。

しかし、この年の出版売上の成長率は依然として 8.1%の低率で、相変わらずの出版不況、それなのに読書率が上向いたのはなぜか。

今までは、男好み、女好みの違いが少しはあっても、ベストセラーと呼ばれるほどよく読まれた本が男女で違うことはあまりなかった。それが、この年、中・高年の男性をひきつけるベストセラーが何種類も重なったことで読書率を上昇させたといえる。

1980 年も出版不況が続いているのに読書率は前年の 44%から 46%へとまた増えた。読書率上昇の原動力は男の 20~30 代で、男 20 代は 49→57%、男 30 代は 46→53%とそれぞれ 7~8%の上昇である。80 年は、第二次石油ショック²から立ち直った日本経済が上昇気運に乗った年であった。上向いた経済力を背景に、日本人は活力を取り戻し、読書にも積極的に取り組んだのである。その中で、若い男性は硬派の本、なかでもソ連の脅威論などにも興味を示している。

低成長下の読書率は、経済成長期とは一転して、買い手市場を基調にして上下する傾向を示してきた。

しかし、2 年続けて上昇した読書率は、3 年目の 1981 年には減少に転じて、前年の 46%が 43%になった。読書率が、低下したのは男性の 20 歳以上の各年代層で、原因は男性向きの本が少なかったからだと思われる。

ところが、1982 年は、読書率が 81 年の 43%から 44%にわずかに 1%ながら回復の兆しを見せた。その原動力になったのは、男性で 30 歳以上で、各年代で 5%ずつも増え、読書率を一昨年水準近くにまで引き上げている。前年とは一変して、男性向け作品の相次ぐ出版が男性の読書率を上昇させたようである。

1983 年の読書率は前年の 44%が 45%になっただけだが、女性は 42%が 44%に上昇、なかでも 30 代は 45%から 53%に急上昇した。

81 年に 43%と落ち込んだ書籍読書率が、83 年にかけて 44、45%とじりじり回復している。しかし、男性だけ見ると、42、46、46%と 82、83 年は横ばいなのに、女性の方は 43、42、44%と 82 年が谷になり 83 年で上昇している。81 年の落ち込みと 82 年の上昇は男性読書率の影響だが、83 年の上昇は 30 代女性を軸とする女性読書率の急上昇によるものだった。その男女の読書率の起伏を決めたのが、主に男性路線の本、女性路線の本だった。男性か女性か、あるいは特定の世代か、どの層かが動き出さないと読書率は上がらない。

1989 年には、国内では昭和天皇死去、美空ひばりや手塚治虫の死、国外では中国天安門事件など激動する国際情勢が出版にかなり影響をもたらし、ヒット作が多く、読書率も 48%と微増した。翌 1990 年は、89 年の消費税導入の後遺症に悩み、さらに業界全体を取り巻く深刻な人手不足は好転の兆しを見せなかった。それから、安定して 48%前後を推移したが、1999 年に 42%まで下がる。男女別で見ると、男性 41%(前回比 14 ポイント減)に対して女性は 43%(6 ポイント減)で、男性の激減振りが目立つ。2000 年は、「だから、あなたも生きぬいて」や「ハリー・ポッター」などの大ベストセラーが多く、

² 1970 年代に 2 度あった、原油の供給逼迫および価格高騰と、それに伴う経済混乱のことを指す。

また「子ども読書年」で、東京の上野公園に「国際子ども図書館」が開館し、各種のイベントや読書推進運動が行われたこともあり、前回比 7 ポイント増で読書率は 49%だった。翌年の 2001 年は、前年の効果が現れたことと、ベストセラーに恵まれたこともあり、過去最高の 59%を記録した。その後、2001 年をピークに下がり続けていた読書率が 2005 年には 51%まで復活した。その後も 40%台後半を維持して、2007 年は 49%である。

このことから、読書率を変動させるのはその時の経済状態である。本は食べ物のようになくなったからと言って死ぬわけではない、景気が上向いている時は、お金にも心にもゆとりができ、本を読み購入する傾向が強い。また、ベストセラー本の有無も重要である。ベストセラーが出れば、読書率も伸び、出ない年は下降する。

第 2 節 「学校読書調査」による読書率の推移

「学校読書調査」(以下「調査」とする)では、1ヶ月間の平均読書冊数と1ヶ月に1冊も本を読んでいると回答した児童・生徒(不読者)の推移を中心にみていく。1963年に小学生 0.5%、中学生 11.5%、高校生 12.0%だった不読者は、東京オリンピック³が開催された1964年には、小学生 7.3%、中学生 33.1%、高校生 29.0%に激増している。これは、東京オリンピックを機に家庭に普及されたテレビの影響が大きいと思われる。この後から、不読者が増えていくのを見ると、1970年前半には読書離れが起きていたと推測される。よって、本稿では1970年からの読書率の推移をみていくことにする。まず、1970年から5年ごとに区切り、推移をみていく。(1985年は資料がなかったため、1986年版を使用する。また、2005年から2007年は3年ごとである。)次に、小・中・高校生をそれぞれ分けて、読書率の変動の要因を考えていく。

1. 年代ごとの読書率

1970年

1ヶ月の読書冊数は小学生 4.6冊、中学生 1.9冊、高校生 1.4冊で、中学、高校生はじりじりと減り続けていたが、今回やっと上昇の兆しを見せた。小学生は比較的に本をよく読む。1ヶ月の読書冊数は 4.6冊で、わずかずつ上昇を続けている。

小学4年では 6.1冊読んでいたのが、中学1年には 2.2冊に減り、高校3年になると 1.4冊に減少する。冊数のうえだけからみれば、読書量は学齢が上がるにつれて減少している。しかし、このことは必ずしも読書の量が、小学生よりも中学生、中学生よりも高校生の方が少ないということではないだろう。“楽しみ読み”の多い小学生と、成長するに従って“考え読み”の多くなる中、高校生とでは、どうしても読書量に差が出てくる。むしろ、読まれる本が次第に本格的なものになっていくために、読む冊数

³ 東京オリンピック開催を契機に競技施設や日本国内の交通網の整備に多額の建設投資が行われ、競技や施設を見る旅行需要が喚起され、カラー放送を見るためのテレビ購入の飛躍的増加などの消費も増えたため、日本経済に「オリンピック景気」といわれる好景気をもたらした。テレビ購入者が増えたため「テレビ番組」の視聴者も多くなった。

は少なくなっていくかと考えられる。

さらに、「1ヶ月に1冊も読まなかった」人は多く、中学生は前年に比べ減ったが、それでも中・高校生の男子の約半数は月に1冊も本を読んでいない。高校生の女子も3分の1がやはり1冊も本を読んでいない。

1975年

4冊以上、つまり、1週間に1冊平均のペースで読んだと推定される者は、小学生男子は47%、同女子は59%、中学生男子は20%、同女子は27%、高校生男子は16%、同女子は18%を占めている。一方、中・高校生の男子では40%前後、同女子では20~30%の者が5月1ヶ月間に文学・教養書類にはまったく手を触れずに終わっている。

1980年

1ヶ月の平均読書冊数では、小4の女子の7.3冊が最高で、高3男子の1.0冊が最低である。男子に比べ女子の方が冊数を多く読み、学年の低い方が読んだ冊数が多いという傾向は例年と変わらない。小学生全体の平均は、5.6冊であるのに対し、中学生1.9冊、高校生1.3冊になっている。

また、最も古い1963年、10年前の1970年の調査と今回の調査を比較すると、1冊も読まなかった=0冊と答えた者は、63年~70年の7年間に激増している。小学生男子は30倍、女子は17倍、中・高校生でも3~4倍である。

次に、読んでいる者についてみると、第1に7冊以上の多読者が、70年に比べて僅かながら多くなっている点をあげることができる。不読者が多く、かつ増えている中・高校生においても、ごく少数ではあるが、多読者が増えている。

第2に、小学生の多読者が極めて多いことである。4~6冊をとってみても、男子27.4%、女子33.7%に達している。

1986年

小学生の1ヶ月平均読書量は本が前年の6.5冊から今回6.0冊に減った。中でも5年女子の減少が大きく8.0冊から6.0冊に2冊の減である。80年から導入された「ゆとりの時間⁴」をきっかけに強まったとされる多読化の傾向が、その運用の多様性と共に少し変化してきたようだ。

中学生は、昨年の1.9冊から1.8冊にわずかだが減り、前年末の減少傾向に歯止めがかからなかった。高校生も昨年の1.5冊から1.3冊に減り、57~58年の最低1.2冊をわずか0.1冊上回るだけとなった。

1990年

減少傾向にあった小学生と高校生の1ヶ月平均読書量は、共に前回より増え、ことに高校生は5年ぶりに1985年の1.5冊の水準にまで回復した。

小学生は1ヶ月平均で前回の6.3冊から7.1冊へ0.8冊増え、1987年から7.4→6.8→6.3冊

⁴ 1977年~1978年にかけての学習指導要領の全部改正(1980年度から実施)によって、教科指導を行わない「ゆとりの時間」が設けられた。ちなみに、ゆとり教育とは、学習者が詰め込みに寄る焦燥を感じないように、学習内容を以前よりも縮小した教育のことである。

微減傾向だったのがやっと上向いた。男子より女子の伸びが大きく、男子が 5.3 冊から 5.5 冊へわずか 0.2 冊の増加だったのに対し、女子は 7.3 冊から 8.8 冊へ 1.5 冊増加した。

地域別にみると、受験戦争の低年齢化が進行している大都市の小学生は 6.1 冊で最低、中都市とは 2.4 冊、小都市とは 1.2 冊の開きがある。

中学生は 2.1 冊で前回と全く同じである。高校生は最近の 10 年間では、1984 年の 1.6 冊をピークに緩やかに下降カーブを描いたが、前回の 1.3 冊から 0.2 冊増えて 1.5 冊になり 1985 年の水準に回復した。

1995 年

書籍の 1 ヶ月平均読書量は、小学生が 5.4 冊で 94 年より 1.3 冊減り、過去 10 年間で最低になった。

高校生も前回より 0.1 冊減の 1.2 冊でこれも過去最低である。

これに対し中学生は前回より 0.1 冊増えて 1.8 冊になった。

小学生の読書量低下の原因は、1 つは 1 ヶ月に本を 1 冊も読まない「不読者」が増えたため、もう一つは、1 ヶ月に「10 冊以上」読む「多読者」が減ったためである。

小学生の読書量が中・高校生より多いのは、幼児期の読書習慣に「ゆとりの時間」の影響が加わったからで、「ゆとりの時間」が導入された 1980 年調査では、その前年、1979 年調査の 4.6 冊から 5.6 冊に急増、以降、多少の変動はあるものの毎回 6~7 冊を維持してきた。それが、今回大幅に減ったのは、1995 年度から学校週 5 日制が導入され、これまで「ゆとりの時間」を読書指導にあてていた学校が、読書指導を断念したためではないか、とみる教師が多い。

2000 年

1 ヶ月間に読んだ書籍の平均冊数は、小学生 6.1 冊で、前年調査より 1.5 冊減った。小学生の読書量の減少は各学年(4~6 年)、男女に及び、特に小 5 女子は 2.0 冊減の 7.1 冊で、小 6 女子も 1.9 冊減の 5.0 冊だった。

一方 1 ヶ月間に書籍を 1 冊も読まなかった小学生は 16.4%で、高校生も前年調査より 3.5 ポイント減の 58.8%になった。

2005 年

1 ヶ月間に読んだ書籍の平均冊数は、中・高校生は前回調査より減少、中学生は 0.4 冊減の 2.9 冊、高校生は 0.2 冊減の 1.6 冊になった。小学生は前回と同じ 7.7 冊である。

中・高校生の読書量の減少の原因は、「ハリー・ポッター」シリーズ(J・K・ローリング著)や「世界の中心で愛をさけぶ」(片山恭一著)などの大ベストセラーが前回より読まれなくなったことである。

一方、1 ヶ月間に本を 1 冊も読まなかった「不読者」は、小学生は前回より 1 ポイント減って 6%になったが、中学生は 6 ポイント増えて 25%に、高校生も 8 ポイント増えて、51%に及んでいる。

2007 年

1 ヶ月間に読んだ書籍の平均冊数は、小学生は 9.4 冊で、過去最高だった前回 2006 年の 9.7 冊より 0.3 冊減ったものの、過去 2 番目の読書量となった。

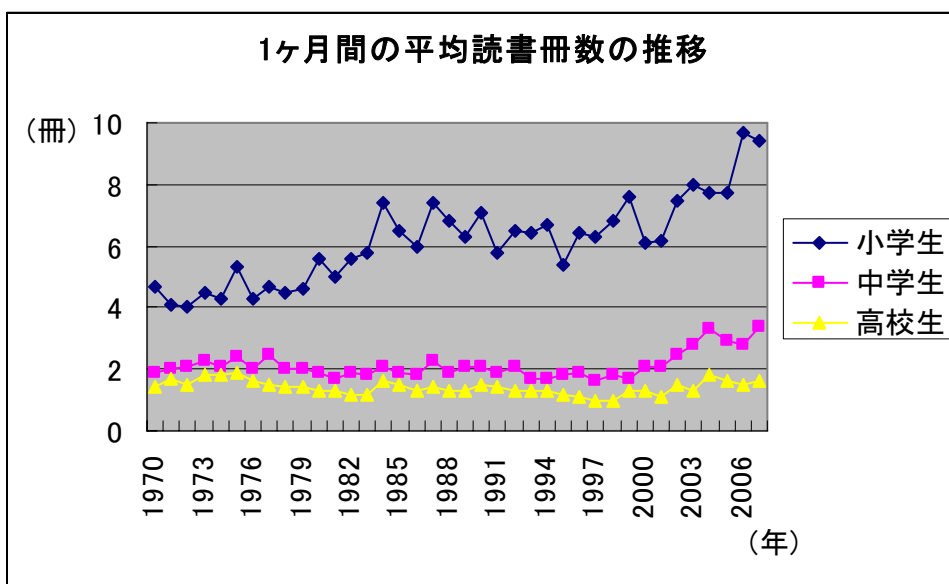
中学生は、長い間平均読書冊数の低迷が続いていたが、2000 年以降数字が上向き、今回調査では前回調査より 0.6 冊増えて 3.4 冊になり、1957 年に並ぶ最高読書冊数になった。

この中学生の読書量の伸びについて、1 つは「バッテリー」「ハリーポッター」「ブレイブ・ストーリー

一」などの多巻からなるシリーズものが人気となり、読書習慣のある中学生がより多くの本を読むようになった。2 つ目は、「恋空」「赤い糸」「今でもキミを。」「もしもキミが。」など、いわゆる”ケータイ小説”がヒットし、読書習慣がなかった中学生もこれらの本を読むようになったこと、3 つ目は全国約 2 万 5000 校もの学校で実施されている全校一斉読書が定着し、忙しい中学生も本を読む時間が保証されるようになったなどが要因として考えられる。

一方、1 ヶ月間に本を 1 冊も読まなかった小学生は 4.5% で、前回調査の 6.0% から 1.5 ポイント減った。中学・高校生も共に、減少している。特に、中学生は 14.6% で前回の 22.7% から 8.1 ポイント減り、中学生の不読率としては、この調査始まって以来の低い数字となった。

図 1 1 ヶ月間の平均読書冊数の推移



[出典：学校読書調査より作成]

2. 小・中・高校生ごとの変動の要因

小学生

小学生の読書冊数はこの 40 年間近く増え続け、2007 年 5 月の平均読書冊数は 9.4 冊である。冊数が増加し始めた 1980 年代は、小学校にゆとりの時間が設けられ、多くの学校で毎週 1 回「図書館の時間」「読書の時間」が実施され始めた時期である。読む時間と読む機会を学校で設けて、教師達が読書について様々な指導を開始したことが、小学生の読書冊数増加として現れている。この時期に子どもの読書に対して社会的関心が集まり、保護者の参加などによる読書のすすめや、公共図書館などの子ども向けの活動などが盛んになってきたことも影響している。最近では朝の読書への取り組みの広がりが、読書冊数の増加に影響していると見られる。

しかし、多くの学校で時間割のなかに読む機会が設けられ、多くの児童が読書している中で、読書冊数がゼロの小学生がかなりいることにも注意が必要である。この子ども達は読んでいないのであり、読みたい本と出会う機会を持っていないと言える。

中学生

中学校に進学すると子供達は本を読まなくなり、学年進行と共に一層読まなくなる。中学・高校生の読書離れは1970年代後半から目立ってくる。中学生の1ヶ月の読書冊数平均は2007年度3.4冊であり、小学生の9.4冊との差は大きい。

減少傾向の続いた中学生の読書冊数は、2000年以降増加し始めている。増加の主因は、全国的に広まってきた朝の読書と、社会現象にもなった話題作品の影響と見られる。朝の読書の広まりは、1ヶ月ゼロ冊という生徒の急激な減少と、そこからくる平均冊数の増加をもたらしている。映画やテレビと連動する話題作品は、メディアミックス効果⁵によって普段本を読まない生徒にまで本を読ませている。2000年の「五体不満足」「だから、あなたも生きぬいて」、2002年から2003年の「ハリー・ポッター」シリーズ、2004年の「世界の中心で、愛をさけぶ」などがその例で、「ハリー・ポッター」は小・中学生の約半数が読んでいる。1990年代後半には50%を超えていた1ヶ月ゼロ冊の不読者が、2007年度には14.6%になっているのも、これらの影響とみられる。

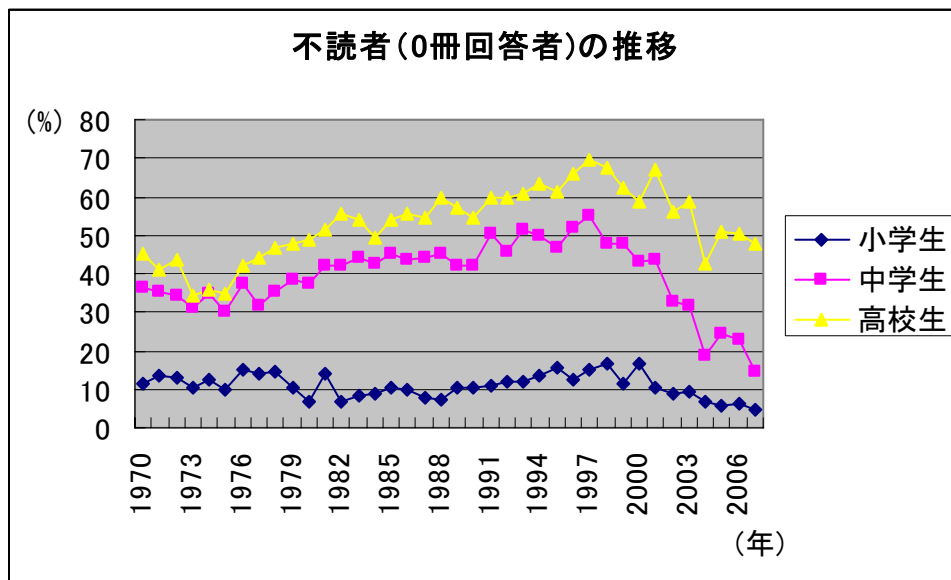
高校生

高校生の1ヶ月平均読書冊数は2007年度で1.6冊である。1990年代の平均1冊と比較すると高校生の読書を取り巻く状況に変化が見られる。2007年度までのデータをよく見ると、平均値からは見えない重要なことがわかる。それは1ヶ月0冊という生徒の多さと、その継続的な増加である。図2は、1ヶ月ゼロ冊という児童・生徒の割合を示すグラフだが、80年代からの約20年間は60%前後の高校生が1ヶ月に全く本を読んでいない状態だった。読書する者とならない者の分化が進行し、読まない生徒の割合が70%近くに達したこともあった。それにも関わらず平均冊数が1.0冊にとどまったのは、30%前後の生徒が多く読んでいたからである。

高校生のこのような読書状況に対する社会的な関心の広がりもあって、近年、読書を活発にするための活動が各地で展開されてきた。その結果として2003年からの読書冊数の増加があるように思う。

⁵ 特定の娯楽作品が一定の経済効果を持った時、その作品の副次的作品を幾種類かの娯楽メディアを通して多数製作することでファンサービスと商品販促を拡充するという手法のことを指す。

図 2 不読者(0冊回答者)の推移



[出典：学校読書調査より作成]

第 2 章 読書習慣の形成

読書習慣を形成することによって、人は本を継続して読むことができる。子供が小さい時から読書に親しめる環境を整備し、読書を繰り返し行える状況を用意し、大人になっても読書を日常的な行為として生活の中に取り入れていけるように、読書習慣の形成を図ることが重要となる。[塚原 2008:34]

読書習慣の形成の流れをみていくことによって、読書離れを食い止めるヒントが見つかるかもしれないと考え、年代ごとに読書習慣が形成されていく過程、あるいはその形成された読書習慣が崩れていく過程を分析してみたいと思う。

第 1 節 幼児期の読書習慣

幼児期の読書といえば、絵本である。近年、絵本は大人にも人気があり、子供の数が減っているにも関わらず、他ジャンルの本を発行していた出版社の参入などで発行点数を大きく伸ばしている分野だという。多くの人にとって本と触れ合う原点になる絵本を中心に、幼児期の読書習慣をみていきたいと思う。

1. 読み聞かせ

幼児期での読書は、主として耳と目を使う。つまり、この幼児期の読書においては、絵本の読み聞かせがとても効果的である。

人間的な交流の中で 1 冊の本と出会い、子供達とお話の世界を共有する。「物語る」行為は書物の出来る以前から人間の生活の中に組み込まれていた。代々、口承で様々な物語が語り伝えられてきた。それは、生きていくための大切なメッセージも含んでいた。しかし、文字ができてからは書物が伝承の大きな役割を果たすことになり、次第に肉声で物語ることはなくなってしまった。現代を生きる私

達は、もう次の世代に口承で伝える術をほとんど持っていない。しかし、優れた本にはそれぞれに生きる力となるものが潜んでいる。その力を「声に出して読む」ことで、読み手と聞き手が共感しあいながら、作品のメッセージを伝えることができると確信している。[高木 2008:64]

また、阪本一郎によると子どもの読書能力の発達段階においても、読書入門期の5歳～小学1年1学期末⁶には、自分で文字を読むのではなく、聴く言葉によって本の世界を楽しむことが大きな部分を占めるが、その聴いて楽しむ経験は、自分で文字が読めるようになったときに生きていくとっている。

それでは、実際に読み聞かせを行っている親達の考えをみていこう。

「なぜ読み聞かせをするのか」を知るために、秋田喜代美氏と武藤隆氏の1996年の「幼児の読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討」の質問紙調査によって、幼稚園に通う子どもをもっている母親達にたずねたものを使用することにする。

「何のためにお子さんに本を読んでいますか」「本を読んであげることはお子さんにとって、どのようなよいことがあると思いますか」という質問をし、それぞれの選択肢について「5 とてもそう思う」から「1 そう思わない」の5段階で評定をしてもらった。読み聞かせの意義として、表1にあげたように、「文字・知識習得」と「空想・ふれあい」という、2つの内容に整理することができた。

表 1 読み聞かせの意義

「文字・知識習得」	「空想・ふれあい」
・文章を読む力が育つ	・空想をしたり夢をもつことができる
・文字を覚えられる	・本を通して親子のふれあいができる
・集中力が付く	・子どもが本の世界を楽しむ
・言葉が増える	・身の回りへの新たな興味をもつことができる
・日常生活に必要な知識が身に付く	・物事を深く考えるきっかけを与える
・話をする力がつく	
・子どもにとって必要な教養がみにつく	

[出典:幼児の読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討「教育心理学研究」44]

全体の75%は、「文字・知識習得」よりも「空想・ふれあい」を重視しているが、「文字・知識習得」を「空想・ふれあい」よりも重視している家庭も、全体の約2割いることがわかった。つまり、読み聞かせという行動はしていても、家庭によってなぜ読み聞かせをするのかという親の考え方は違っていることが分かる。

次に、読み聞かせに対する目的、意義の認識の違いは、家庭での読書環境にどのような違いをもたらすのか。読み聞かせは、子どもを読書へ導く行動の1つでしかないので、読み聞かせだけでなく、

⁶ 近年では、以前に考えられていたよりも早い時期から子どもが本に興味を示すことが分かってきたため、読書入門期以前にさらに一段落を加えることが適している。[天道 2005:7]

お母さんやお父さんが本を読んでいるところを見せるなどの、子どもを読書へ導く行動についても、親の読み聞かせに対する考え方によりどのような違いが見られるのか調べた。

まず、親の考え方による4つのタイプに分けた。

- ・「文字・知識習得」「空想・ふれあい」という2つの意義の両方とも全体の平均よりも認定地が高かった<両意義高群>
- ・いずれも全体の平均よりも低い<両意義低群>
- ・「文字・知識習得」だけが低い<文字・知識重視群>
- ・「空想・ふれあい」だけが低い<空想・ふれあい重視群>

まず、読み聞かせの量は、両意義高群が平均14.1分、空想・ふれあい重視群が10.4分、文字・知識重視群が9.8分、両意義低群が6.3分と、タイプによる明らかな違いが出た。

「空想・ふれあい」を重視する家庭では、読み聞かせをする時間や頻度が高く、読んでいる時間も長いのに対し、文字・知識のみを重視する家庭では、あまり読み聞かせの頻度は多くない。また、読み聞かせ方は、表2のように、大きく分けると、いろいろ会話を楽しむ読み聞かせ方「会話型」と、一人で子どもが読めるように親が援助する読み聞かせ方「一人読み促進型」があるが、文字・知識を重視する家庭では、一人読み促進型の読み聞かせをすることが多く、空想・ふれあいを重視する群では、この読み方はほとんど行われていないことが分かった。

表2 絵本の読み聞かせ方

「会話型」

- ・子どもと絵本を通して会話しながら読むようにしている
- ・書かれている内容が分かるように、絵などに説明を加えながら読むようにしている
- ・本に出てくるものの名前を教えながら読んでいる
- ・あまり話しかけたりせず、書かれている文章をそのまま読むようにしている

「一人読み促進型」

- ・子どもが認める所は、子どもに読ませながら読んでいる
- ・字を教えながら読んでいる
- ・子どもが自分で読んだ時には読み方を教えてあげる
- ・読んでいる間や読んだ後で、書かれている内容が分かるように説明を加えながら読むようにしている
- ・子どもが一人で本を見たり、自分で読んだ時には誉めるようにしている

[出典: 幼児の読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討「教育心理学研究」44]

読み聞かせの目的を、「文字・知識習得」のみと捉えている家庭や読み聞かせの意義をあまり認めていない家庭では、読む頻度や時間も少なく、読み聞かせをする際にも、できるだけ早く一人で読めるように促す読み聞かせスタイルを取ることが、他の群に比べて多いことが分かった。これらの結果は、活動への意味づけによって行動の頻度ややり方という読書を準備する家庭環境が異なることを示している。

親子で本と触れ合う機会が増えることによって、読み聞かせの楽しさが分かり、読み聞かせの過程自体を重視するようになる。それを理解していない家庭では、読書が子供の学力向上や言語力向上のためだけに思っているのではないかと考えられる。

2. 絵本が与える影響

幼少期に充実した読書体験をもつことが、以後の読書に大きな影響を与えることが様々な調査から確かめられている。ここでは、「幼少期に絵本を多く読んでもらった子供は大人になっても読書家であるか」という質問に対し、小・中・高校生対象の2000年の学校読書調査と私が大学生を対象にしたアンケート調査、10代から70代以上までの全世代を対象とした2006年の読書世論調査の3つの資料を元に比較していく。

まず、2000年の学校読書調査で、「絵本を読んでもらったことがあるか」聞いたところ、小学生は「読んでもらった」（「よく読んでもらった」と「時々読んでもらった」の計）が79%、中学生は72.3%、高校生は75.0%に及び、多くの児童・生徒が幼少期に家の人に絵本を読んでもらった経験を持っている。

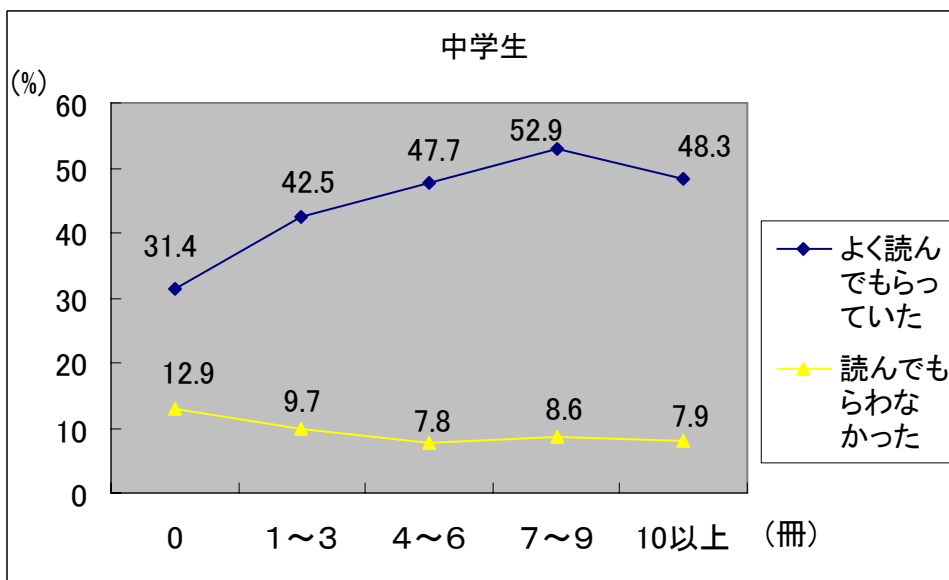
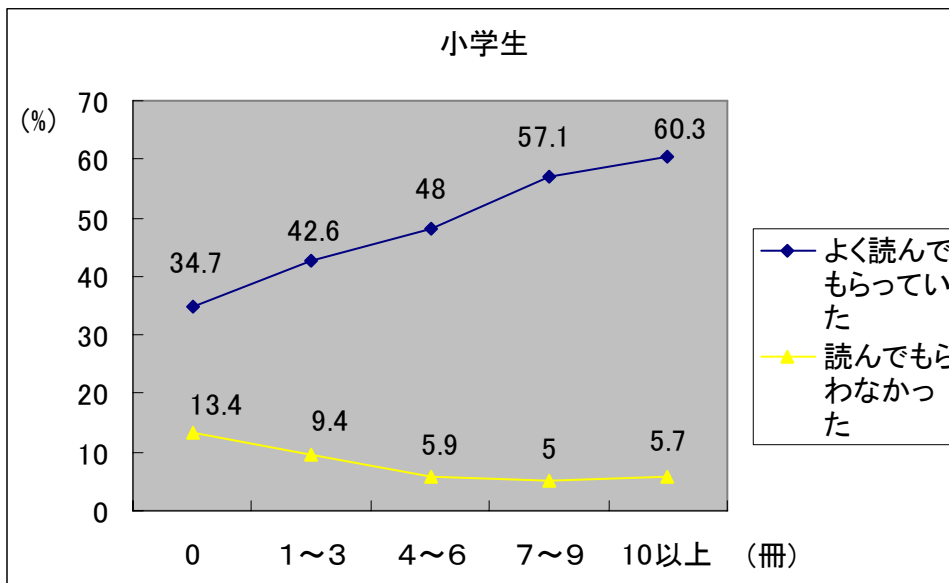
そして、絵本を「よく読んでもらった」子は、その後、本をよく読むようになるのかという、問いを調べるために、1ヶ月間に読んだ本の冊数とクロスさせてみると(図3参照)、小学生で1ヶ月間に本を10冊以上読んだ児童は、「絵本をよく読んでもらった」が60.3%に達するが、1冊も読んでいない児童は「よく読んでもらった」が34.7%に過ぎない。

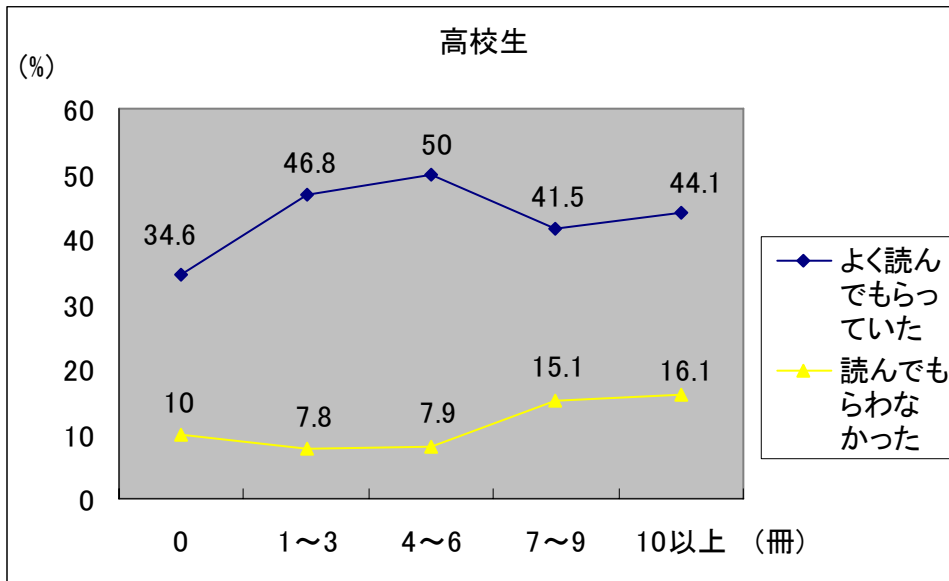
中学生も月に7~9冊読んだ生徒は、絵本を「よく読んでもらった」が52.9%に及び、10冊以上では48.3%、1冊も読んでいない生徒の「よく読んでもらった」は31.4%と少ない。

高校生も月に4~6冊読んだ生徒の絵本を「よく読んでもらった」が50.0%、10冊以上では44.1%に及ぶが、1冊も読んでいない生徒は、「よく読んでもらった」が34.6%に留まっている。

このデータは、幼少期の絵本の読み聞かせがその後の子どもの本の読書量に大きな影響を与えていることを示し、幼少期の絵本の読み聞かせの大事さが改めて分かる結果となった。

図3 1ヶ月間の書籍読書量別にみた幼少期に「よく絵本をよんでもらった」児童・生徒と「読んでもらわなかった」児童・生徒の割合（無回答は除く）

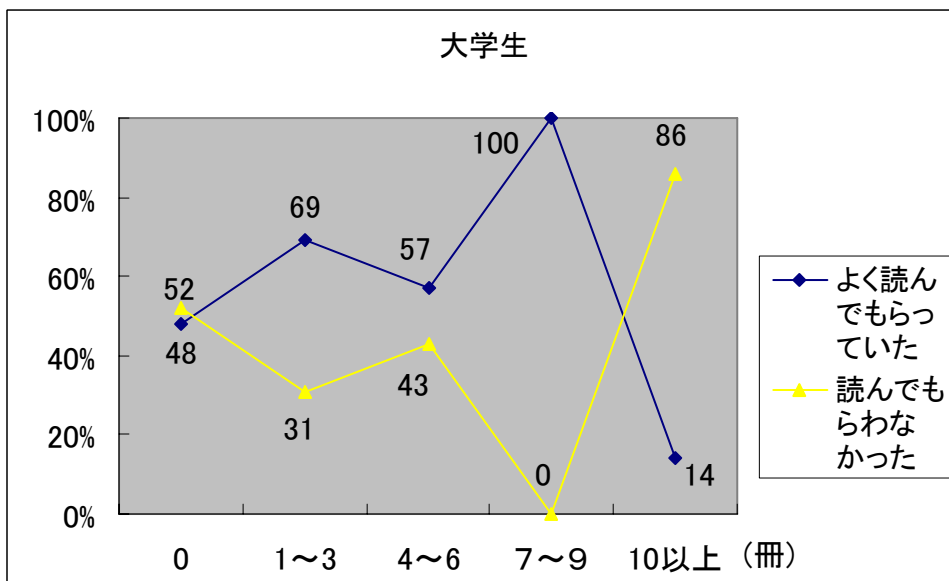




[出典：2000年の学校読書調査より]

次に、私が大学生 125 人を対象に行ったアンケートの結果をみていく。私の調査では、読んでもらっていた絵本の冊数をストレートに聞いても、幼少期の事なので、忘れてたり、うろ覚えで正確なデータが取れないのではないかと考えたため、70冊の代表的な絵本の名前と著者名を書いたリストの中から、読んだことのある絵本を選んでもらった。また、現在の1ヶ月の読書冊数を聞き、小・中・高校生と同様に絵本の冊数とクロスさせた。

図 4 1ヶ月間の書籍読書量別にみた幼少期に「よく絵本をよんでもらった」学生と「読んでもらわなかった」学生の割合（無回答は除く）



[出典:アンケート調査の結果により作成]

この結果では、小・中・高校生とは異なるものが出た。1~3、4~6、7~9冊では、小・中・高校生同様に「よく読んでもらった」大学生が「読んでもらわなかった」大学生を上回っているが、0冊と10冊以上においては、全く逆の結果が出た。これは、大学生になり多様化する生活習慣の中において、幼少期の読書量とは関係なく、読むようになる人もいれば、読まなくなるようになる人もいると見て取れる。やはり、生活スタイルが小・中・高校生と違い、自分で取捨選択するものが増えることによって、読書に親しむものもいれば、疎遠になるものも出てくる。生活スタイルが読書量に深く関わっている証拠である。

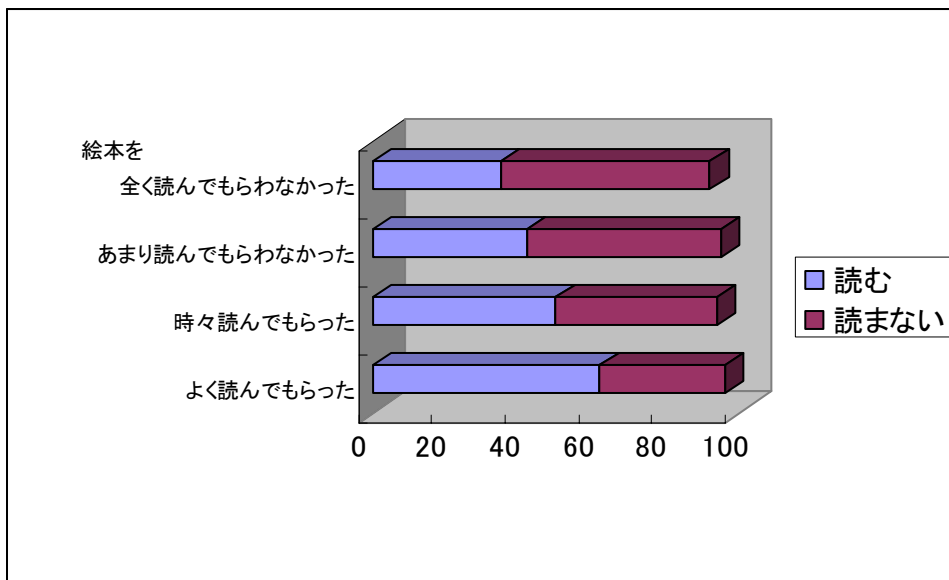
そして、2006年には学校読書調査と同様の調査を、全世代を対象にした読書世論調査でも行っている。絵本を読んでもらった経験について聞いたところ、「あまり読んでもらわなかった」32%、「時々読んでもらった」28%の順が多い。「よく」「時々」を合わせた「読んでもらった」人は全体の44%、「あまり」「全く」を合わせた「読んでもらわなかった」人は53%で、半数近くの人がある程度絵本を読んでもらった記憶があるといえる。

絵本を読んでもらった頻度は世代間の差が大きく、若い世代ほど絵本によく接している。10代後半では「よく読んでもらった」が42%、20代では36%で、10代後半と20代は7割以上が絵本をある程度読んでもらっていた。

絵本を読んでもらった頻度と現在の読書率などとの関連をみると、子供のころ絵本をよく読んでもらった人ほど、成長してから本好きになる割合が高いことが読み取れる。

絵本を「よく読んでもらった」人のうち、現在も書籍を「読む」と答えたのは62%で、「読まない」の34%を大幅に上回った。

図 5 絵本を読んでもらった頻度と現在の書籍読書量



[出典:2006年の読書世論調査より]

3. ブックスタート活動

この絵本に関連して、活字離れに歯止めをかける試みとしては、英国で1992年から、乳児に無料で絵本を配布する「ブックスタート」という活動が行われている。

ブックスタートは、すべての赤ちゃんの周りで楽しくあたたかいひとときがもたれることを願い、自治体が行うゼロ歳児検診に訪れた赤ちゃんと保護者に、絵本や子育てに関する資料などが入った「ブックスタート・パック」を手渡す活動である。日本では2001年に、市町村自治体の事業として始まった。2008年12月31日現在、実施自治体は684市区町村で、地域に生まれた全ての赤ちゃんを対象に行っている。

図書館員、保健師、ボランティアなど、多くの人に関わって進められ、子育て支援や母子保健、地域づくりなど、様々な分野から注目が集まっている。地域の人と親子一組一組と向き合って座り始める。絵本を実際に読んで聞かせ、保護者に体験してもらう。

ブックスタートの発案者であるウェンディさんは、2006年に行われたブックスタート国際会議で、「ブックスタートと教育とはどのように結びつくのか」という質問に次のように答えた。

「私は、英国の子供たちが学校で成功するようにとプレッシャーをかけられていることをとても心配している。ですから、本を読むことは楽しいことであり、喜びであり、親子で楽しさを分かち合うというのはとても素敵なことなのだと伝えるようにしている。赤ちゃんに本を読んであげても、赤ちゃんは、それが本だなんて分からない。自分のことを愛している人がページをめくっている、これが自分のことを愛している人の声なんだな、こういう時間は気持ちがいいな、と感じて、それから段々と本っていいものだな、と思い始める。」

幼少期には絵本の読み聞かせが重要であり、家庭や地域もそれを自覚し取り組んでいる所が多い。私のアンケート調査においても絵本を1冊も読んでもらったことのない学生は一人もいないという結果が出る程、絵本の読み聞かせは幼児がいる家庭に浸透している。幼少期に家庭や地域で作上げた読書習慣は、小学生になっても継続されていくのだろうか。次の第2節では、小学生の読書習慣について言及していこうと思う。

第2節 小学生の読書習慣の形成

小学生の1ヶ月平均の読書冊数は、多少の増減を繰り返しながらもこの40年近くで2倍以上に増えている。読書量増大の要因は何なのか。読書習慣が形成されているからなのだろうか。

ここでは、「小学生の読書習慣が形成されているか」をみるために、平日の学校から帰宅した後の行動や1週間の読書頻度などをみていく。

1986年の学校読書調査（以下「調査」とする）では、最近の1週間に、授業や宿題など学習の他に本を読んだ日は、「大体毎日」が20%で、「2日に1度くらい」が14%、「読んだ日もあるし、読まない日もある」では、58%という回答で、1週間に「本を読んだ日がない」は、8%しかいない。ほとんどの小学生は、1週間に最低でも1日は本を読む習慣があることを示している。次に、平日の読書の時間帯を聞いたところ、最も読書をよくする時間帯は、「自習時間・読書や図書館の時間」で、83%に達した。これは、「読書の時間」を設定している小学校が多く、この時間の読書が小学生の読書量を

大きく引き上げているといえる。

次は、1989年の帰宅後の行動の調査で、「子供達が学校から帰ってからどう過ごしているのか」尋ねている。トップだったのは「テレビ・ビデオを見た」で、約9割を占める。これに次いで、「宿題・勉強をした」「漫画を読んだ」が多い。4番目に「本を読んだ」が入り54%である。中学・高校生の「本を読んだ」の項目がそれぞれ、38.8%、26.9%なのと比較すると、小学生の半分は読書習慣があるのではないかといえる。

このように、小学生には学校での読書の時間が設けられていることに加え、その習慣が家でも発揮されていることがいえる。

この学校で読むことの取り組みの一つに、「朝の読書」運動である。

高校生の“不読者”が社会問題になり始めたのは1988年ごろで、この年に『1ヶ月間に本を1冊も読まない高校生が60%を越したこと』に危機感を持った千葉県船橋市の船橋学園女子高校(現・東葉高校)の林公教諭と大塚笑子教諭が始めた。これは、朝、授業が始まる前の10分間、生徒と教師それぞれが自分の読みたい本を持ってきて読むというもので、最初は生徒達が本を読むかという不安はあったが、それは取り越し苦労に終わり、年々実施校が増え、2008年12月26日現在では、全国の小・中・高校の68.5%にあたる2万5997校で実施されている。

この「朝の読書」については、第4節でさらに詳しく取り上げようと思う。

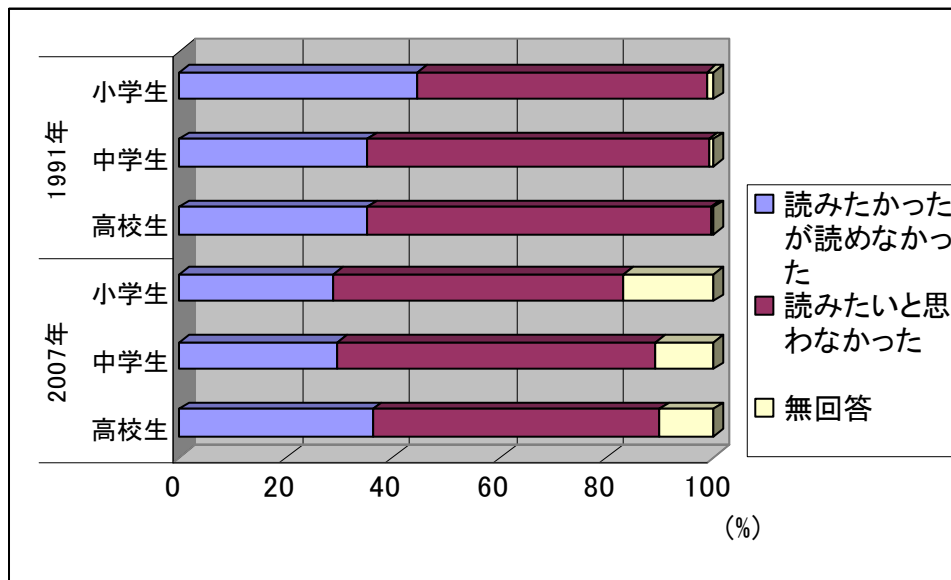
第3節 中学・高校生の読書習慣の希薄化

中・高校生の「読書離れ」は深刻化している。最も、読書を必要とする中・高校生が読書から離れていく要因は何か、またどうしたら読むようになるのか、学校読書調査(以下「調査」とする)を元に調べる。

まず、何故読まないのか、“不読”の理由を明らかにしていこう。

まず、1991年と2007年での「1ヶ月間に1冊も本を読まなかった児童・生徒になぜ本を読まなかったか」を聞いた調査を見ていこう。

図6 1ヶ月間に本を読まなかった理由



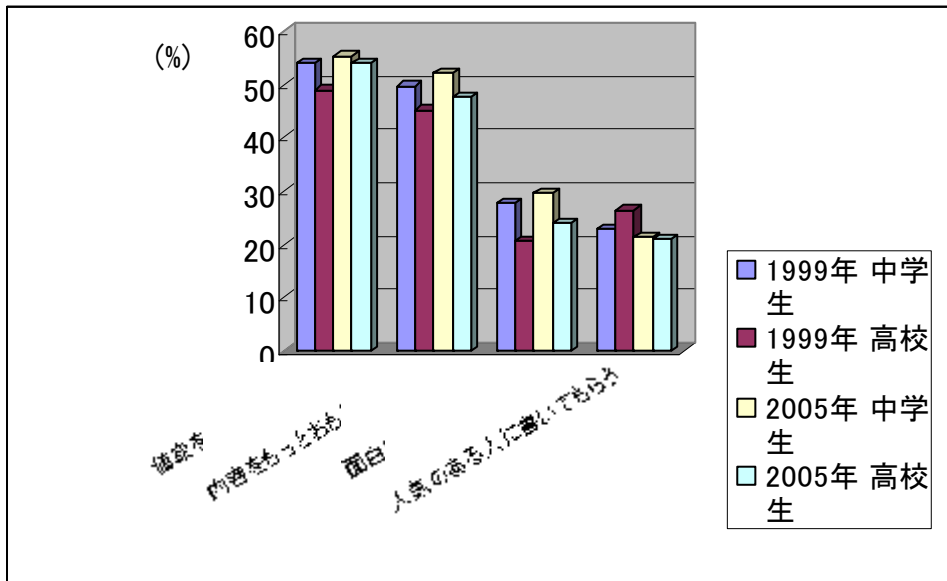
[出典 1991年と2007年の:学校読書調査より作成]

ここで特徴的なのは、高校生が91年より2007年の方が「読みたかったが読めなかった」が増えている。読書離れが騒がれているとは言っても、時間がなく、本当は読みたいと思っているが読めない人が多いということであろう。次に、「読みたかったが読めなかった」子に、さらにその理由を聞くと、次のような結果になった。

1991年は、トップが「読みたい本がなかった」で中学生45.6%、高校生36.8%、2位が「遊び・スポーツで時間がなかった」中学生35.5%、高校生38.2%、3位は「勉強・塾・習い事で時間がなかった」中学生39.5%、高校生37.1%となっている。また、2007年では、トップが「部活動で時間がなかった」中学生51.8%、高校生51.7%、2位が「勉強・塾・習い事で時間がなかった」で中学生42.3%、高校生43.9%、3位が「読みたい本がなかった」中学生39.9%、高校生30.2%である。91年よりも2007年の調査では部活動や塾や習い事などの課外活動が多忙になってきている。しかし、「読みたい本がなかった」が3位に入っているということは、中・高校生向けの出版物が充実し、またそれらに導いていく教師や読みたいと思える本が整っている学校図書館などがあれば、本を読むようになることが示唆される。

次に、「どうすればもっと本を読むようになるか」を聞いた質問の結果をみていこう。1999年と2005年の調査を使用して、上位4つの方法を挙げた。(図7参照)

図7 読書量を増やすための方策



[出典:学校読書調査 1999年と2005年より作成]

99年も2005年も1位は変わらず、「値段をもっと安くする」であった。携帯電話代などの料金もあり、お小遣い制の子も多いためやはり、値段を安くして欲しいという要求が多い。中・高校生にとっては、いくら安くなったとはいえ、まだまだ本の値段は高いものなのである。また、内容やタイトルがおもしろい、という基本的な欲求が圧倒的に多い。ただ、この調査では「おもしろい」の中身に言及していないため、どのようなものを中・高校生はおもしろいというのか調べていく必要があると思う。

このように中・高校生は、深刻視されている割には「読みたい」と思っていることが読み取れる。ただ、毎日の時間や勉強に追われ多忙な生活を強いられているため、その時間が確保できないといったところだろうか。しかし、1ヶ月に10冊以上読んでいる者もいる以上は、読むことが楽しいとさえ思えば、自然と読書をしていくのではないかと思う。その読むことが楽しいと思うまでには、まず1冊の本を読破すること、1冊読破できたらまた次のものへと継続させていくこと、そして、徐々に本の質を高めていくような本選びをすることが大切だと思われる。これらを指導していくのが学校の先生の役割だと思うが、小学生はともかく中・高校の教師は、毎日の授業の準備や課外活動の指導、受験勉強の指導などに追われ、読書指導まで手が回らないというのが現実である。

まずは、「読書離れ」がどれだけ深刻で、読書指導をすることがどんなに大切かを改めて自覚する必要がある。教師や学校が変われば、生徒も児童も変わる。そして、実際に教師や学校、生徒を変えた「朝の読書」運動の取り組みについて次の4節で紹介していきたいと思う。

第4節 朝の読書運動

全国一斉読書運動が全国に広がり、少しずつ成果をあげている。ここでは、まず全校一斉読書の実施状況について述べていきたいと思う。

2007年の調査で、「あなたの学校では全校で一斉に本を読む時間がありますか」という質問をした。

その結果「ある」は、小学生 93.4%、中学生 87.4%に及ぶが、高校生は 42.8%に下がる。

次に全校一斉読書で変わったことは何か。自分の学校に一斉読書の時間が「ある」と答えた小・中・高校生にそれを聞いた。(複数回答)

その結果、小・中・高校生の各 1 位は「本を読むことが増えた」で、小学生は 50%、中学生は 51.7%、高校生は 41.0%に及ぶ。「本を読むことが好きになった」は、小学生 42.8%、中学生 25.5%、高校生は 17.1%で、年齢が上がるにつれて減っていく。やはり、よい結果を生み出していることが分かる。しかし注意しなければいけない要素もみられた。「本屋さんに行くことが増えた」「学校図書館に行くことが増えた」「地域の図書館に行くことが増えた」の 3 つを合計すると、小学生は 63.7%に及ぶが、中学生は 41.2%に下がり、高校生はさらに 25.0%に下がる。これは、中・高校生にとって一斉読書が押し付けになっていないか懸念される。押し付けられることが最も読書嫌いを生むからだ。多様な価値観を持ち始める中・高校生には、一人ひとりに沿った読書指導が要求される。

それではここで「読書離れ」に少しずつ防止効果を持ち始めている「朝の読書運動」の取り組みについて述べていこうと思う。

朝の読書を始めたのは、千葉県船橋学園女子高校(現・東葉高校)の教諭であった林公さんと大塚笑子さんである。朝、10 分間毎日自分の好きな本を読む。たったこれだけのことで、当時の船橋女子高校の卒業生のほとんどが本好き、読書好きになっていったということである。

それでは、ここで朝の読書の 4 つの原則を書こう。それは、「みんなでやる」「毎日やる」「好きな本でよい」「ただ読むだけ」である。

「みんなでやる」

学校で行う教育においては、生徒全員に対し教師全員で責任をもつ、しかも生徒全員に対し公平に責任を持つという考え方に基づいている。学校全体で教師も生徒もそろって毎朝取り組んでいるということが一人ひとりの生徒に対して無言の影響力を及ぼしていて、これが、一人にされていたら絶対に本など読もうとしない子まで、本を読む方向に動かしてしまう大きな力になっている。

「まいにちやる」

毎日 10 分間という方法は、何らかの力をつけるための最長の方法、できないことをできるようにするための最良の方法である。どんなことでも、人間の能力を伸ばす最大の秘訣は、コツコツと少しずつでも毎日、根気強く続けることにある。

「好きな本でよい」

読む本は子ども自身に選ばせる、自分の好きな本を何でも選んでよいということには、生徒一人ひとりがしっかり自分を見つめなおして欲しい、本当の自分を発見して欲しい、自分の隠れた可能性や能力に気づいて欲しい、といった願いがこめられている。自分の好きなモノを発見する努力自体が、どんなにささやかに見えようとも、子供達にとっては新しい自分の発見であり、新しい自分の創造だとさえいってもよい。

「ただ読むだけ」

ただ読むだけというのは、感想文や記録のたぐいは一切求めないということで、人間がありのままに生きることそれ自体を大切にするという考えに基づいている。

読書感想文を書かされることで読書嫌いになったという生徒がとても多い。何かのためという現代人特有の生き方はやめて、今本を読んでいるその時が楽しく充実してさえすれば、それが一番大切であるという考え方である。[林 1997:13-21]

朝の読書運動は、シンプルにすることでより多くの人に浸透するようにと 4 原則にしたそう。この一見、簡単に見えることをやるのが、現在の教育現場ではいかに大変かを、林公さんの著書を通して伺えた。しかし、現在、日本全国の小・中・高校の約 6 割はこの朝の読書運動を実行している。読書の大切さが分かってきた証拠である。

ところが、問題は山積みである。現状は厳しく、高校にいたっては未だ 3 割という普及率の低さであるし、また、この 4 原則通りやっていないところもあるという。

毎日ではなく週 1 回だったり、生徒が読書をしている間に教師は雑用をこなしていたりと、本来の意図とは違う形で広まっている。毎日やることで、習慣が付き読書をする力もつく。教師が共に読むことで、身をもって生徒に読書の大切さを教えることができるし、教師自身、忙しい毎日の中で心の休憩が出来る機会が得られるのではないかと思う。

朝の読書の本来の意味を理解し、なんとなく皆がやっているからではなく、読書の必要性をきちんと自ら考えて実施していくことが教師に求められている。

おわりに

最後に、本稿の問題設定である「読書離れの原因とそれを防ぐ方法」についての結論をまとめたいと思う。読書離れの原因として挙げられるのは、中・高校における課外活動の多忙さ、受験中心の生活による読書習慣の消滅、テレビやビデオ、インターネットや携帯電話などの簡単で手に入りやすい情報源への移行などが考えられる。しかし、この位までなら私にも予想できていたが、できなかった原因があった。それは、教師や親など子供に読書を薦めるべき大人の「読書離れ」への自覚の無さである。読書習慣を作るのは、学校、家庭、地域、様々な人の助けが必要だが、やはり、学校と家庭の環境が整っていなければ、読書習慣を作るのは難しいことだろう。「読書離れ」と騒いでいる大人たち自身の読書率が 50%を切っていることから、子供、大人を含めた「読書離れ」への対処が必要であると思った。また、「読書離れ」は今に始まったわけではなく、私たちの親の世代が学生だった 1970 年代から始まっている。未だに、この「読書離れ」が社会問題として解決されていない事がとても残念であるが、着実に成果を上げている活動もあるので、これからも根気強く読書推進活動を行っていくことが大切である。

「読書離れを防ぐ方法」として最も注目するのは「朝の読書」運動である。1988年に始まったこの取り組みの効果は、2006年の小学生の読書冊数過去最高の 9.4 冊を記録したことや 2004 年の中・高校生の不読者が 10 ポイント以上減少した事などから、見受けられる。詳しくは 4 節に書いたが、シンプルな 4 原則によってまとめられており、誰にでもできるところが利点である。あとは、学校側の読書推進活動への理解があれば始められるのだが、ここでも、矛盾がみられる。小学校までは、「読書は大切」とうたい、読書推進活動も積極的に行われているが、中学・高校になると、世間での「読書離れ」対策はどこ吹く風で、受験勉強や部活動の推進ばかりで読書への熱い思いは感じられない。特に、進

学校と呼ばれる高校においての実施率が低いのが残念でならない。私の出身地である福島県の高校の実施率は 30%で、東北地方で最下位であった。私自身も、進学校だったが、確かに朝は毎日、国語や数学、英語のテストの時間だった。当時は、それが当たり前だと思っていたし、本に時間を取られるのはもったいないとも思っていただろう。しかし、大学生になり、自分の進路を考えてみたり、社会についての興味が出てくると、読書をしないことが、いかに精神衛生上よくないか分かった。私自身、高校の時はいろいろな悩みで葛藤しイライラすることが多かったが、大学生になり、時間が出来て、自分と向き合い、好きな本を読むようになったとき、あまりイライラせず考えつめなくなったと感じる。

本の中にある言葉や人物が、自分のその時の支えになり励まされたからだ。教訓めいたものや立派な人の伝記でなくても、文学作品やエッセイ、ビジネス本にもその要素はあると思う。

「一度、読書の楽しさを知れば、読むなどと言われても読むようになる」という言葉がとても印象に残っている。読書はそのくらいの魅力を秘めているということだ。その魅力を教えるためには、ある程度「読む」ということを経験しなければいけない。朝の読書運動に代表されるような全校一斉読書運動などの学校での取り組みが、家庭や地域にも広がりそれを継続していかなければ読書離れの根本的な解決にはならない。

【参考文献】

- 秋田喜代美、石井順治 2006 「ことばの教育と学力」明石書店
秋田喜代美 1998 「読書の発達心理学 子どもの発達と読書環境」国土社
教育と医学の会 2008 No.655「教育と医学」2008年1月号 慶応義塾大学出版会
スティーブン・クラッシュェン、長倉美恵子・黒澤浩・塚原博共訳 1996 「読書はパワー」金の星社
天道佐津子 2005 「読書と豊かな人間性の育成」青弓社
長倉美恵子 2003 「子どもの読書活動をどう進めるか」教育開発研究所
林公 2007 「朝の読書 その理念と実践」リベルタ出版
林公 2006 「子どもの学ぶ力を伸ばす「朝の読書」自ら考え自ら学ぶ意欲を育てる」メディアパル
林公 1997 「朝の読書 実践ガイドブック 1日10分で本が好きになる」メディアパル
毎日新聞社広報部編『読書世論調査』1947～2008年版
毎日新聞社広報部編『学校読書調査』1954～2008年版

【オンライン資料】

- 特定非営利活動法人ブックスタート「各地の活動」<http://www.bookstart.net/local/index.html>
2008.12.31 更新
朝の読書推進協議会 「朝の読書実施状況」http://www1.e-hon.ne.jp/content/asadoku_bunseki.html
2008.12.26 更新
財団法人 出版文化産業振興財団 この本読んで！の公式サイト 「日本の宝物絵本 30選」「ロングセラーの海外絵本 30選」<http://www.ehondaisuki.jp/003/backnumber.html> 2006年6月更新

